



## 『大江戸ゴミ戦争』 杉本苑子

参勤交代制度が定着するにしたがって江戸の人口は増え、急速な都市化が進み、吐き出されるごみも膨大になっていった。幕府は試行錯誤の末、寛文6年に専業の塵芥請負人を各町内のごみ掃除に充てる。集めたごみは船に積み、永大浦の沖に棄てられた。ごみの山はやがて埋立地になり、深川などもこうしてできあがったという。

今も昔も変わらぬ悩み多きごみ問題を杉本苑子は古典落語のような名調子で短編小説に仕立て上げた。「やはりゴミには、悲劇調はそぐわない」として一話一話が軽妙なユーモアで彩られている。ごみ処理業を独占しようとする豪農を皮肉った「瓜長者の野望」、大金を隠したぬかみそ桶を棄てられ町娘が大騒ぎする「春のうらの十万坪」、埋め立て地をめぐる抗争をコミカルに

描いた「芝浦海戦記」などいずれも歴史的想像力を駆使した逸品ぞろいだ。

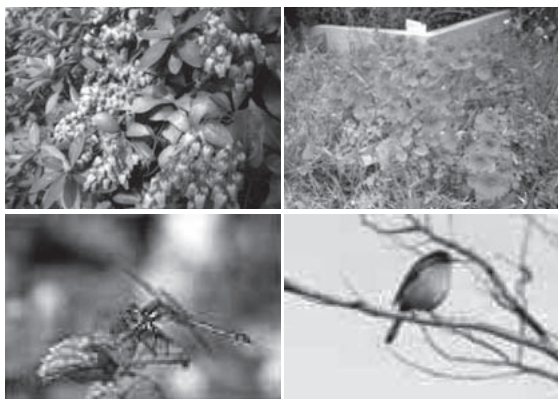
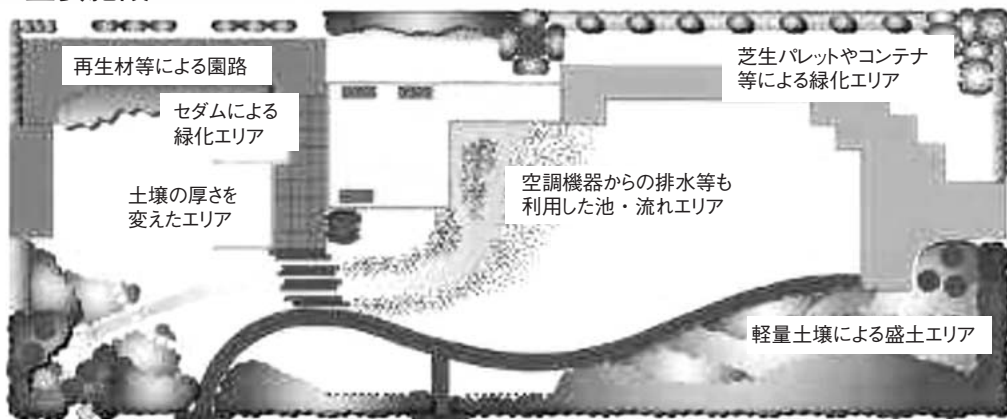
もちろん杉本はごみ問題を軽くみているわけではない。「笑ってなどいられない深刻な局面のもかかわらず、つつい吹き出してしまふところにごみというものの負う宿命的な難点があります」と複雑な胸の内を明かしている。

すぐれた歴史小説には現代に通じるヴィヴィッドな問題意識が孕まれている。この作品も大量生産・大量消費・大量廃棄があたりまえになった高度文明社会への警鐘と受けとめることができるだろう。

ごみの問題を考えることは人間の未来を考えるとことだ。そのことに気づかなければ〈喜劇〉が〈悲劇〉に転じる日は遠くない。  
(高倉)

○文春文庫・450円(税別)／すぎもと そのこ 1925年東京生まれ。文化学院卒。63年『孤愁の岸』で直木賞、78年『滝沢馬琴』で吉川英治文学賞、87年『穢土荘厳』で女流文学賞。

### <主要施設>



屋上庭園の特徴を解説版で紹介しています。

中高木から地被類まで、多様な植栽の生育状況の調査や昆虫・鳥類の調査もしています。